

都立豊島高等学校 90 周年記念式典 校長式辞

夏の到来を間近に感じるこの佳き日に、東京都立豊島高等学校創立九十周年記念式典を挙げていただけますことは、この上ない喜びでございます。

日頃より本校の教育を支えてくださる来賓の皆様、地域の皆様、同窓会、そして保護者の皆様に、心より御礼申し上げます。

多くの方々とともに九十周年という節目を迎えたことは、本校の歩みが地域と社会に支えられてきた何よりの証であり、深い感慨を覚えるところでございます。

さて、この記念すべき折に、本校が歩んでまいりましたこれまでの軌跡を、改めて振り返ってみたいと存じます。

本校は、昭和十一年四月、青山において、東京府立第十高等女学校として開校しました。二・二六事件が起こり、世情が騒然とするさなかにあっても、この新しい学校には、定員の五倍もの志願者が集まったと記録に残っています。創立当初から、大きな期待を背負った学校でした。

初代校長である野間忠雄先生は、「学問も大切であるが、まず人間をつくること」と唱え、特に校内の清掃、いわゆる「清整作業」を重んじました。この考えは、形を変えながらも今に息づいています。

昭和十三年、本校は現在の地に校舎を構え、新たな一歩を踏み出しました。そこで繰り返し説かれたのが、「至誠」という言葉です。これは、「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」という儒教の古い教えに由来します。この言葉に象徴される「至誠」の精神が、本校の校是として定められ、九十年にわたり脈々と受け継がれてきたのです。

しかし、その道のりは決して平坦ではありませんでした。特に戦時下では、生徒が学業を離れ、軍用品を作る工場や学校内に作られた工場での作業に従事していました。並々ならぬ苦難があったと伝えられています。

昭和十七年には、本校定時制の前身である東京府立清明女学校夜間部が開校しました。戦後しばらくは電力不足により毎日停電していたため、生徒たちが家からローソクを持ちより、その明かりで授業を受けていました。

どれほど学びの機会が制限されても、教育の灯(ともしび)を絶やさなかった先人たちの努力が、今日(こんにち)の本校を支えています。

戦後、学制改革により、東京都立豊島高等学校として新たに歩み始めました。男女がともに学ぶ学校となり、

新しい校歌も生まれました。校舎は二度の改築を経ながらもこの地にあり続け、幾多の生徒の成長を見守ってきました。

ここで、本校の校是「至誠」の意味について考えてみましょう。

「至誠」の出発点は、自分に誠実であること——言い換えれば、自分に嘘をつかないことです。これはたやすいことではありません。日々の学習や部活動の中で、人間関係に悩む中で、あるいは働きながら学ぶ日々の中で、私たちは周囲の期待や環境に流され、本当の思いを見過ごしてしまうことがあります。そのようなとき、静かに己の内面に向き合い、何を大切にするのかを問い直す。それが「至誠」の第一歩です。

しかし、「至誠」は、自分の内に閉じる言葉ではありません。この言葉を生んだ古(いにしえ)の教えは、「至誠」について、自分を高めるだけでなく、他者をも生かすものと説いています。自分に誠実であろうとする人は、他者に対しても偽りなく向き合おうとします。そしてその誠実さは、信頼となって人と人とを結びつけていきます。自分への誠実さとは、独りよがりな閉じこもることではなく、むしろ、他者と真摯に向き合うための土台なのです。

そこで、在校生の皆さんに一つの問いを示します。

「これからの自分に対して、今の選択は誠実であるか。」

この問いに、唯一の正解はありません。答えは、日々の選択の一つひとつの中にあります。

時代がどう変わっても、この問いの意味が失われることはありません。「至誠」とは、立派であれ、と一方的に求めるものではなく、自らのあり方を見つめるため、ひとりひとりに開かれた道標です。どうかこの言葉を胸に刻み、これからの歩みに生かして欲しいと願っております。

結びに、本校の発展にご尽力いただいた歴代の校長先生や教職員、地域の皆様、同窓会、そして保護者の皆様に深く敬意を表しますとともに、今後とも変わらぬご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。本校が百周年に向けて、なお一層の飛躍を遂げていくことを願うとともに、その実現に向け私も力の限り努めてまいります。これをもちまして式辞といたします。

令和八年六月二十二日

東京都立豊島高等学校 校長 江川 徹